

女性の視点を取り入れた 避難所運営を考える

28年前の阪神淡路大震災で亡くなった人は6,434人で、そのうち女性が男性より約1,000人多かったことを、セミナーで最近知りました。

子育てを終え、親の介護や看取りを行い、夫に先立たれた高齢女性が、多く犠牲になったようです。

その理由の一つは、少ない年金で暮らす彼女たちが、都市部の耐震性の低い「古い住宅に身を寄せていた」からで、死因の約8割は建物の崩壊などによる「圧死」だったそうです。

災害時における女性の視点の必要性が浮き彫りにされた一コマです。

今では、世界の常識となりつつある「ジェンダー視点」が提起された発端は、この阪神淡路大震災でした。

避難所のトイレは、男女共有で利用しづらい、夜は暗くて怖い、間仕切りがなく着替えや授乳の場所がない、離乳食や生理用品が支援物資にない……などの声があったようです。

また、震災をきっかけに解雇された約10万人の多くは、パートやアルバイトの女性たちだったと聞きました。いらだつ夫や恋人に暴力を振るわれたなどの相談も数多くあったとのことで、女性や弱者などへのしわ寄せは、地震災害などの非常時に顕著に出てきます。

平素から男性ばかりでなく、女性管理者も入れた避難所運営を考えておくべきであることの大切さを、再認識したネットワークセミナーでした。

みなさんの地区はどうですか。

